

I
『源氏物語』の思想と信仰

1 『源氏物語』の仏教思想

はじめに

『源氏物語』の仏教思想として論ずべき課題は多いが、小稿では、源氏の出家の本意がどう語られているか、その道筋について考えてみようと思う。前稿^①と重なるところもあるが、視点を移して、この問題の、全編にわたる見通しを立てようとしたものである。

源氏は事あるごとに出家の本意を口にする。若い時からそうである。またかと思いつながりながら読んでゆくのであるが、場面場面において、出家を口にする道筋がついている。それを取り出してみようと思う。具体的には、次の項目を取り上げたい。

僧坊と源氏——藤壺恋慕

輪廻と怨霊——厭世と悲哀

沈淪と栄華と遁世——須磨流離

悲哀と出家——紫上の死

余説——幻巻以後

物語は、源氏の出家の本意を、大きく分ければ、男女の仲と、世事・政治の面から語る。男女の仲から出てくる出家の本意が本筋であるが、それも分ければ、藤壺・六条御息所の筋と紫上の筋とに分かれ、最終的には、紫上の筋に

絞られてゆく。大まかにはそのようにつかむことができると思うが、以下、できるだけ本文に即しながら、見てゆきたいと思う。

僧坊と源氏——藤壺恋慕——

若紫巻をみると、源氏が北山の僧都の僧坊を訪れる場面がある。賢木巻では、雲林院の律師の坊を訪れている。若紫巻では、わらわ病をなおすために北山を訪れ、賢木巻では、藤壺恋慕に苦しんで雲林院に参籠している。それぞれ、北山の桜や、眺望が源氏の心身を癒し、紫野の紅葉や草花が源氏の苦しみを慰めることになっているが、閑雅な僧坊の生活が、しきりに源氏を誘う様子も書き込まれている。「梵門」の詩には、禪場に対する憧憬がしばしば詠ぜられている⁽²⁾。嵯峨天皇は、「梵宇本無塵滓事」(「過梵釈寺」『文華秀麗集』)と詠じ、多治比清貞は、「香刹青嶺頂。登攀指世情」(「遊北山寺」同上)と詠じた。山野の寺院を訪れて塵心の伏することを喜んだのである。

法花三昧行ふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくる、いと尊く、滝の音に響きあひたり。

(若紫、一・一六七)⁽³⁾

おし明け方の月影に、法師ばらの闕伽たてまつるとて、からからと鳴らしつつ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散らしたるもはかなげなれど、この方の営みは、この世もつれづれならず、後の世はた頼もしげなり。さもあぢきなき身をもて悩むかな、などおぼし続け給ふ。

(賢木、一・三六六)

源氏はその世界に魅了される。詩人たちと同様である。源氏はさらに一步踏み込んで、僧坊に身を投ずることを考える。僧坊の勤行の生活は、この世の所在なきさを感じさせることはないであろうし、後の世も安心である。なので、このようにあじきない身を扱いかねているのだ、と思う。

北山の僧都は、源氏に、「世の常なき御物語り、のち世の事」(若紫、一・一六一)などを説く。「のち世」は、「の

ち瀬」のことかと思われるが、それも後世の意となる。源氏は、僧都の言葉を深刻に受けとめる。

わが罪のほどおそろしう、あぢきなきことに心を占めて、生ける限りこれを思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき、おぼしつづけて、かうやうなる住まひもせまほしうおほえ給ふものから、昼の面影心にかかりて恋しければ、

(若紫、一・二六二)

「昼の面影」とは、紫上のこと、紫上は登場と同時に、出家を引きとどめる存在となっているのであるが、賢木巻においても同様である。

律師のいと尊き声にて、「念仏衆生撰取不捨」と、うちのべて行ひ給へるはいとوراやましければ、なぞやとおぼしなるに、まづ姫君の心にかかりて思ひ出でられ給ふぞ、いとわろき心なるや。

(賢木、一・三六七)

藤壺恋慕は罪である。若紫巻では「生ける限り」と言っているが、「この世ならぬ罪」(賢木、一・三六三)でもある。「あぢきなき身」「あぢきなきこと」と、「あぢきなし」を繰り返しているが、罪である藤壺恋慕を終生続けるであろう予感のもとに、現世も後世もよいことはないと思ひ、僧坊に身を投ずることを思う。そう思う途端に紫上を思う、ということになっている。終生恋慕をおさえることはできそうにないから、出家できない、という風になつていない。脇から、紫上の面影が現れて、出家を遮る形となっている。源氏にあっては、紫上に対する愛情は、「あぢきなきことに心を占めて」ということにならないようである。語り手に「いとわろき心なるや」と評されているように、紫上に対する思ひも、藤壺への恋慕と同様に断つべきものであるが、そうはならない。藤壺恋慕から出家を思ひ、反転して紫上を思うというようになっていく。紫上は、藤壺のかたしろであるが、罪や苦惱と離れた存在となっているのであろう。

なお、この両場面には、僧坊の側からする源氏賛美がなされている。ついでにそれを見ておこうと思う。

この世にののしり給ふ光源氏、かかるついでに見たてまつり給はんや。世を捨てたる法師の心ちにも、いみじう